HAPPY END

黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＨＡＰＰＹ　ＥＮＤ

【Ｎコード】
Ｎ７４１４Ｔ

【作者名】
黒

【あらすじ】

友達や家族とうまくいかなくなり、家出をした成瑠の前に不思議な少年　和沙が現れる。
和沙の前向きな言動に励まされていく成瑠。
和沙の正体とは・・・？

0

もう、いいでしょ。
てか、あたし、めんどくさがりだし。
こんなの、これ以上耐えられないもん。

「あーあ・・・」
白石成瑠(しらいしなる)高1。
ごくフツーの女子高生。
フツーよりはちょっとうるさくて、めんどくさがりだけど。
「どこ行こ・・・？」
学校も家も、誰も信用できなくなっちゃって
とうとう人生初の家出をしてしまった・・・！
こんなめんどくさがりなあたしでも、今回は結構悩んだつもり。
カンカンと音を立てて遮断機が下りてくる目の前の線路に、
飛び出してみようかななんて思うくらいには。
「めんどくさ・・・」
気付いたら、一歩踏み出してた。
ああ、あたし死ぬんだ。ま、いっか。
もう、めんどくさいし・・・
「っ」
不意に、腕を引っ張られた。
『何やってんだよ！死にてーのか！？』
「誰？」
『お前こそ誰だよ。迷惑な奴だな。』
「な・・・っ」
「なにがわかんのよ！あんた何なの！？関係無いじゃん！」

『関係無くないね。俺が今あんたと話してる時点で。』
何、こいつ。
『俺の家来いよ。』
「は？」
『どうせ、自殺志願者だろ？俺がお前を助けてやる。』
「助ける・・・て、何？」
『いいからっ！来いよ。』
そう言うと、意味不明なこの男は
あたしの腕をつかんだまま走りだした。
迷惑な奴はどっちだよ！

『ほら。ここだ。』
「はーっはぁ・・・」
『なに疲れてんだよ？』
もういいよ。めんどくさい。
「・・・白石成瑠。」
『あ？』
「名前！あんたも名乗りなよ。」
『ああ・・・俺は赤崎和沙。よろしくな！』
「よろしく。で、何？」
『俺の家、一緒に住もうぜ。』
「やだ。」
『なんでだよ？』
馬鹿なの、こいつ？
「あんた家族いるでしょ。迷惑じゃん。」
『いねーよ。』
「え、なんで？」
『さぁ・・・なんでだろな？』
なんで・・・そんな顔してんのよ。
「ゴメン。」

『え、謝るとこあった？』
「いいから、ゴメン。」
『で、いいの？』
一緒に住むことか。
ま・・・でも、どうせ行くアテもないし。
「うん。お世話になります。」
『おっけ！』

なにやってんだろ、あたし。
死ぬ覚悟までして家出したのに。
でも、とりあえず・・・
考えるのがめんどいから、今日は寝ちゃう。

0（後書き）

1話目とはいえ・・・
物語進まなすぎました（―＿―；）ゞ
スイマセン。

1

『おーい・・・』
ウルサイなぁ・・・
「ん・・・」
『おいっ！起きろ！』
「はっ！？」
『は？じゃねーよ！いつまで寝てんだっ健康体か！！』
どんなツッコミだよ・・・。
「今、何時？」
『11時ですが』
「え・・・まじ？」
『大マジ』
こんなに寝たの、いつぶりだろ？
相当疲れてたんだなー
『疲れてんだろーし、寝かせてやりたいけど・・・』
『色々、話もあるしな！』
「話・・・？」
『そ。まず、なんであんなことしたのかってこと』
うわー・・・めんどい
「・・・」
『ちゃんと言えよっ！』
「・・・分かったよ」
『よし』
どこから話そうか・・・
「学校・・・で、1番仲いい子がいたの。里紗(りさ)って子でね」
「でも、ま、喧嘩しちゃって。里紗の彼氏とあたしが仲良かったか

ら」
『ふーん・・・』
「それで、里紗がクラスの子に、”成瑠は人の男を取った”って広めてさ・・・」
『最低だな』
「よくあることだよ。よくあるの・・・そんな子、いっぱいいる」
「でも、里紗だけは違うって思ってた。ホントの親友だって」
「・・・それで、学校行かなくなっちゃったの」
なんか、ヤな空気だな
『家に引きこもる前にあんなことしたのか・・・？』
「いや、あたし、そこまで思いつめてないよ」
「ちゃんと、他にも理由あって、ああなったの」
『・・・そか。分かった。じゃ、メシにすっか！』
あれ・・・話題逸らしたな。もしかして、気つかってくれたのかな？
「ありがと」
『は？何が？』
「いいからっ」
『お前って、いっつもワケわかんねーな！』
「うるさい」
『なんだよー・・・』
あ。なんか、気付いちゃったかも。
コイツ、話題が途切れたりする時、いつも寂しそうなカオするんだ
「あんたは？」
『なにが？』
「あんたのことも、話してよね」
『えー！』
「教えてよ。なんで、1人暮らしなの？」
『・・・』
「なんで、あたしのこと、助けるの？」

『なんでって・・・』

「ちゃんと言ってよね。逃げるなんて、卑怯だよ」

2

しばらく沈黙が続いた
特別長いわけじゃなかったけど、その時はすごく長く感じた
『なんで、助けんのかって聞いたよな？』
「うん」
『なんとなくだよ』
なに・・・てきとーなことといってさ・・・
なんとなくで助けられるあたしは何なわけ？
『お前のこと、知ってた』
「え？」
急にこっち見るから、びっくりした
『前から、何回か見かけたことあって・・・気になってた』
気になってたって・・・
「どういうイミ？」
『家に帰る途中、いっつも暗い顔してたから』
知ってたんだ・・・なにもかも
「・・・なんで1人暮らしなのか、は？」
そこが気になる
もしかして、和沙は、あたしよりもっと辛いなにかを・・・
『わかんねー！』
はい？
「真面目に答えてくれる？」
『だって・・・わかんねーんだよ』
嘘ではないみたいだけど・・・
『家族がいた気もするし、いなかった気もする・・・記憶が曖昧なんだ』
記憶が曖昧・・・？そんなことってあるの？

「それ、いつから？」
『わかんねー・・・気が付いたら、こうなってたから』
何、それ
そんなの悲しすぎるじゃん
あんたは一体今まで、何を感じて生きてきたの？
何のために生きてきたの？
『そんな顔すんなよ！もう、慣れたしさ』
「なんで・・・」
わけわかんない
「なんで、そんな状況で、生きてられんの？なんで、諦めないの？」
あたしなら、そんなの・・・絶対無理だよ
『俺もわかんねーけど・・・でも、なんか、死んじゃダメだって思った』
こんな風に生きてる人もいるんだってはじめて知った
今までのあたしの世界は、自分だけが悲しくて、自分だけが嫌われて
周りはみんなキラキラしてた。不幸な人なんていなかった
『お前だけが持ってる悲しみなんかねーからな！調子乗んなよ！』
調子乗ってなんか無いけども
でも、励ましてくれたのかもしれない
「うん」
『俺、悲しい話嫌いだから。何が何でも、幸せになってやるっ！』
そう言って笑った和沙はキラキラしてて
それがあたしにも降ってきそうで
幸せを分かち合うっていうのは、こんな感じなのかなとか思ってみた

「あたし、あんたの記憶探すことにした！」
そう言ったら、和沙はポカンて変な顔してた
『何言ってんだ？』
「あんたの記憶の曖昧なとこ、探して埋めていくの！」
『えーいいよ・・・そんなの』

これは、譲れない
「ダメ！絶対やるからっ協力してよね」
『・・・ハイハイ』

3

今日はいい天気だ・・・
さっそく聞き込み行こっかな♪
「和沙ー出かけてくるね」
『おー行ってらっさい』
やっぱり、記憶無くすなんて交通事故か何かしかあり得ない。
でも、引っかかるのは、記憶が“曖昧”ってこと・・・
『成瑠ちゃん？』
聞きなれない声・・・
「はい・・・？」
振り向いてみても、やっぱり知らない顔だ。
なんで、あたしの名前知ってるんだろ・・・
『あ、やっぱりそうだ。』
「あの・・・」
なんなの？この人・・・
『僕、黒瀬大地（くろせたいち）って言うんだ。よろしく！』
「はあ・・・」
『成瑠ちゃんは、交通事故のこと聞いて回ってたよね？』
知ってたのか。
「あ、はい。」
『敬語じゃなくていーよ！僕も高1だし。』
「う・・・うん。」
なんか、この人、絡みづらいかも・・・。
『僕の親がね、ここら辺で交通事故があったって言ってたんだ。』
「ほんと！？」
はじめてだ・・・もしかしたら・・・
『うん。5歳くらいの男の子が、車にはねられたんだって。』

これって、ビンゴ！？
「その男の子、その後どうなったの？」
『即死だったって・・・そう言ってたはず。』
即死・・・死んじゃってたのか・・・
じゃあ、和沙じゃないってことじゃん・・・あーあ・・・。
『あれ・・・成瑠ちゃんが知りたかったのと、違った？』
「え？あ、ううん。ありがとう。」
あたし、そんなに残念がってただろうか・・・。
『そっか・・・って、やばい！バイト遅れるっ』
バイトしてんのか・・・すごいなー
『成瑠ちゃん、ゴメンね！ばいばいっ』
「うん。ばいばーい」

あーあ・・・結局手がかりなしかー
「ただいまー・・・」
『おー？元気ねーなー？』
自分の事なのに、ずいぶん気楽だな。
「交通事故の話はあったんだけど、記憶喪失とは違った」
『へー』
へーって！
『あ、じゃあさ、病院行ってみたらどうだ？』
病院？
『カルテっつーの？そーゆーの残ってんじゃね？』
確かに！
「そーだね！そうするっ」
ちょっと希望が見えたっ
このままだと、一生わかんなそうだしね・・・
『ほら、それよりメシ！もー腹減ったー』
なにこの急なだらけ様・・・？

「もー・・・ちょっと待って、作るから！」
『え？』
和沙が驚いた顔をしてコッチを見た
「なに？」
『作んの？』
何言ってんの、この子は・・・
「ほかにどうするわけ？」
『コンビニとか、ファーストフードとか・・・』
ダメ男の典型だ！
「そんなんばっかじゃ、体に悪いでしょ！」
『えー・・・』
まったく、なんにも出来ないのか・・・
てか、この冷蔵庫の中身じゃオムレツくらいしか出来ないな。
『へーけっこー手際いいな！意外！！』
こいつ、いちいち失礼だな。
「黙ってて！」
あたしだって、料理くらい・・・
『う・・・っ』
うめき声のあとに、バフッてソファに倒れこむような音がした。
「和沙？」
予感が、的中した。
「和沙！ちょっと、どうしたの！？」
頭を抱えて、苦しそうにしてる。
「和沙っ！」
『なんか・・・記憶が・・・ッ』
記憶・・・？それって
「なんか思いだしそうってこと！？」
『うっ・・・』
全身の力が抜けたみたいに、急に静かになった。
「大丈夫？」

『ああ・・・』
息切れしてる・・・
「どうしたの？急に」
『お前が、料理作ってるの見て・・・』
なにそれ
「そんなにあたしの料理姿って目に毒だったわけ？」
『いや、ちげーよ！そうじゃなくて・・・』
なによ・・・
『母親の料理姿がぼんやり浮かんできて、思い出せそうだったんだけど・・・』
「だけど？」
『頭痛くなって、あんまりちゃんとわかんなかった・・・』
「そっか・・・」
記憶を取り戻すって、大変なのかな・・・？
『でも、けっこう綺麗なキッチンで・・・３０歳くらいの茶髪の人だった。』
「他には？分かったことない？」
少しずつでもわかれば・・・
『背は、１６０まではないかな・・・細めで・・・優しそうな感じ。』
「よし、これからも、何か思いだしたら言ってね！」
『おー。』
こうやって、記憶の欠片を集めていけば、きっと記憶を取り戻せるはず！
大変そうだけど、でも、和沙があたしを助けてくれたみたいにあたしも和沙の役に立ちたいもん。
頑張らなきゃ！

4

「＊＊・・・」
『なに？』
「お母さん・・・＊＊の・・・大きくなった、姿・・・見られないかも・・・。」
『どうして？』
「お母さん・・・死んじゃうから・・・。」
『痛いの？』
「痛くないわ・・・ありがとう・・・＊＊・・・。」
『泣かないで・・・？』
「ごめんね・・・＊＊・・・」

「和沙！」
『うわっ！！』
「どうしたの？うなってたけど。」
もうちょい心配そうにしてくれてもいいのでは・・・
『変な夢、見た。』
「夢？」
なんだったんだ・・・あれ。
「どんな夢？」
『お母さんが、死ぬ夢。』
短く言いすぎたか・・・成瑠もさすがにビックリしてるし。
「どういうこと？和沙のお母さん、死んでたの？」
わかんねー・・・
『こないだ、思い出しかけただろ？母親の姿。』
「うん。茶髪の３０歳くらいの小柄な人、でしょ？」

そう。そのはずなんだけど・・・
『違った。』
「は？」
うおー・・・もったいつけずに早よ言えやって顔してんな。
『今回の人は、黒髪でちょっとポッチャリって感じだった。』
「どういうこと・・・？」
俺だってわかんねーよ！
『あ！子供の名前呼んでた！』
あ、でも・・・
『・・・でも、そこだけ、聞き取れなかった・・・。』
「変。」
そんな改まって・・・俺が変みたいじゃん。
「お母さん2人？再婚？養子？まず、それ、ほんとに和沙の・・・」
“ほんとに和沙の記憶なの？”

俺だって・・・わかんねーよ・・・
「ご・・・ごめん・・・」
『いや、別に、気にしてねーし・・・。』
やべ、わざとらしかったかも。
「ほんとに、ごめん！」
って謝りながらどっか行くんかいっ！
『・・・っだよ・・・・』
ほんと、嫌んなる・・・
誰か俺について教えてください。
ピンポーン
って音がして、いつもなら成瑠が出るけど・・・
『はい。』
俺が出るしかねーし・・・
頼むからセールスだけは勘弁・・・！断れん！！

『こんにちは♪』
『は？』
誰だ、こいつ・・・
『大地です。和沙君、だよね？』
気持ち悪ぃ・・・あっち系入ってんじゃね？
『あー！あっち系って思ったでしょ？』
なんで分かんだよ・・・
『僕、人の心読むの得意なんだー。』
こいつと一刻も早く離れたい。
『なんか用か？』
『知りたくない？自分のこと。』
こいつ・・・！
『僕、知ってるよ。君のこと。』
なにがしたい？
『だから、なんだよ？』
『成瑠ちゃんのこともね。』
『てめぇっ！』
考えるより先に手が動いた俺は、暴力に慣れてんだろーな。
「和沙・・・？何してんの？」
2階からヒョコっと顔を出したこいつは、
この世で1番空気が読めない女だと思った。

5

どうすんだ、この空気
俺は大地とかいう変な奴に殴りかかろーとしてて
その相手は相変わらずヘラヘラしてるし
成瑠は若干引いてるし・・・。
完璧に俺が変人扱いだな、これは
「和沙・・・」
『成瑠』
「え？」
『2階上がってろ』
「でも・・・」
頼むから！
『早くしろ』
「・・・わかった」
悪い・・・けど、コイツはヤバイ気がする
接触させたくない
『んふっ』
『なんだよ？』
笑い方も気持ち悪いな
『いや、成瑠ちゃんのこと相当好きなんだね』
『なにが・・・っ』
こいつ、ほんとに意味わかんねー
『でも、本気にならない方がいい』
は？
『本気になっても成瑠ちゃんが悲しむことになるだけだ』
『どういう・・・』

『ヒ・ミ・ツ』
っ・・・
『じゃあ、僕帰るね。おじゃましました』
完全に負けた感じだ
何も聞き出せなかった
いや・・・ほんとは俺、聞きたくなかったのかもしれない
『くそ・・・・っ』
「和沙・・・・？」
『成瑠・・・・』
「大丈夫？」
『ああ』
「大地君と、知り合いなの？」
それは、こっちのセリフだ！
『あいつのこと知ってんのか！？』
「うん。こないだ交通事故の話教えてくれた。ま、それは死亡事故だったんだけどね」
『・・・俺は、今初めて会った』
「え！？そうなの？」
『あーあんな変人、知り合いにいねーよ』
俺は、嘘をついた
ほんとは知り合いなんていない
このへんで知ってる人なんていなかった
だから、誰を見ても宇宙人見てるみたいに馴染めなかった
「ま、大丈夫なら良かった。あたし、ちょっと病院行って聞いてくるから」
『おー行ってらっさい』
成瑠が頑張ってる
なんでかわかんねーけど俺の為に頑張ってる
俺は、そうまでしてもらえるような人間なのか？
本当の俺は、ちゃんと、ふつうの人間なのか・・・？

勉強が出来なくたっていい
スポーツが出来なくたっていい
カッコよくなくていいし
お金だっていらない
ただ・・・ただ普通に、周りの人と同じように
喜んだり、笑ったり、泣いたりできたら、それでいいんだ

「病院ってそういうの教えてくれるのかな・・・？」
「何か御用ですか？」
「あの・・・この病院に赤崎和沙っていう男の子が入院してたことありませんか？」
「ああ・・・赤崎和沙っていったら・・・入院はしてないですね」
「え？」
「１０・・・１１年前かな・・・５歳の男の子が車にはねられたんです。うちの病院に運び込まれたんですけど、その時にはもう・・・。その子の名前が、赤崎和沙だったはずですけど・・・」
「・・・え・・・？」

6

「他に、いないんですか・・・？」

赤崎和沙っていう男の子は、５歳のときに車にはねられて死んだ

ほんとに和沙だっていうわけ？
だって和沙は生きてるんだもん
一緒に暮らしてるんだもん
死んでるはずない、ありえない
人違いに決まってるじゃん
「他にはいませんよ？」
じゃあきっと、この病院じゃなかったんだ
「あの、この辺りで他に病院ありますか？」
「いや・・・ここは小さな街ですから。入院なんか出来る病院はうちだけですよ」
それじゃあ・・・
『ちょっとあんた』
私・・・？
『何を話しこんでるんだ？』
病院に来るにしてはやけに元気そうな、２０歳くらいの男の人
「あ・・・すいません」
『いや、そうじゃなくて・・・今さっき和沙って言ってなかったか？』
「あ、はい。赤崎和沙って子が入院してた病院を探してるんです」
『あんた、和沙の知り合いだったのか？』
「え？」

いかにも和沙を知ってる口ぶり
でも“だった”って言い方からして
『あいつが死んでからもう１１年だけど・・・』
やっぱり、死んじゃった方の和沙君のことか
『あの金髪がなつかしーぜ。生まれつき金髪なんてうらやましいよな！』
金髪・・・和沙も金髪だけど・・・
『てか、あんたは和沙とどういう関係だったわけ？もしかして彼女！？』
「あ、いえ・・・」
『あー違うかー。俺は、あいつの近所の兄ちゃんってとこだな』
じゃあ、すごい仲良かったのかな
『あ！知ってる？あいつな、右肩に？印の傷あんだぜ！』
「あの、病院ではお静かに」
『わ、すいません』
あれだけ大きい声出せば、注意されるわ
『じゃ、俺行かなきゃだから。またな』
変な人だったな
でも、まさかほんとに和沙じゃないよね・・・？

「ただいまー」
『おかえりー遅かったな？』
「あ、うん・・・」
金髪・・・
「和沙って、髪染めてんの？」
『あ？あーこれは地毛なんだよ』
生まれつきってこと・・・？
「肩、見せて」
『は？』

「右肩見せて」
『ちょっ・・・なんだよ急にっ』
「いいから！」
そんなことあるはずない
同姓同名で交通事故にあってて生まれつき金髪で
「右肩に、？印・・・」
嘘でしょ・・・？
『これか？なんか傷跡あったんだよ。なんでかはわかんねーけど』
これじゃまるで・・・
『成瑠？』
「ねぇ・・・赤崎和沙っていう男の子はね、５歳のときに交通事故で死んじゃったんだって」
『は？なに言ってんだ？』
和沙が、死んでる・・・？
だって
あたし、めんどくさがりだもん
考えるの苦手だもん
そんなの急すぎて、
意味　分かんないよ

6（後書き）

意味わかんないですね、ほんとに笑

7

「和沙、あたしに何か隠してない？」
成瑠は、隠していてほしいような
隠していてほしくないような微妙な表情だった
『隠してねぇよ』
「嘘！だって、じゃあ、どういうことなの！？死んでるの？生きてるの？どっちが嘘でどっちがほんとなの？もうわけわかんない！！」
知らねぇよ
『そんなの、俺だってわかんねぇよ！』
「っ・・・」
なんなんだよ
俺はいったい何なんだよ
こんな思いしたくない。逃げたくてにげたくて
でも、死ねない。俺は、まだ死んじゃいけないんだ
「ごめん、部屋行く」
何かを、伝えなくちゃいけないハズなんだ
それが何なのか。なんで伝えなくちゃいけないのか
それすらも、もう覚えてないけど

ひとつだけ
変わらない記憶がある
この家で目が覚めた時から今まで
ずっと俺の中にある記憶・・・―

「和沙くんっ！」

『＊＊、どうしたんだよ？』
「見て！きれーな石でしょ」
『＊＊、石なんか集めてんのかっ？』
「集めてないよー！ただちょっときれいだったから！」
『えーそうかー？』
『ダメだよ。和沙はサッカーしか興味ないから』
『＊＊！別にそんなことねーよ！』
「でも、ほんとにサッカーの話ばっかりだよね」
『うんうん』
『テレビも好きだぞ！サッカー見るんだ！』
『あははっ』
「和沙くん、おかしー！」

小学校2年生くらいの和沙って奴
それが自分かどうかはわかんねぇけど
同い年くらいの男と女もいるけど、どっちも名前だけ聞こえない
でも
ほかの記憶と違って
楽しそうで、幸せそうで
これが本当の俺の記憶であるように、いつも願う

7（後書き）

短かったです・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7414t/

HAPPY END

2011年12月19日18時51分発行